

花の歌 歳時記

前田康子

「今日蟬が鳴いたよ」七月のある朝、その年の蟬の声を聞くと、私は誰かにそう言わずにはいられない。夏の蟬は毎年、梅雨が明けの日を知っていて、土から出てきて羽化し、鳴き始める。

一人目の子の臨月のとき、その年初めての蟬を聞いた朝に陣痛が来た。蟬どころではなくなった。病院でだんだん陣痛がきつくなり始めた頃、今度は牛蛙が低い声で鳴き夜になった。産婦人科は、近代的な建物だったが、なぜか田んぼの真ん中にあつたのだ。陣痛の重い痛みと、牛蛙の鳴き声が妙にあつていて、おかしかった。

今、二人目の子の出産予定日が間近に迫ってきた。今度の病院は、自然の豊かさが世界文化遺産にもなっている、下鴨の、糺の森のそばに位置している。去年の秋、零余子がなっている頃、初めてこの病院を訪れた。生まれてくる子は、最初にどんな鳥の声を聞くだろう。そしてどんな匂いの風に吹かれるだろう。



絵・ユリ／小柳吉次



ひまわり
向日葵

向日葵

日本画家の山口華楊に「白露」という向日葵の絵がある。種が実って首が重くなった向日葵が等身大の大ききで描かれ、その横には草紅葉した細い草が画かれている。二十歳の頃初めて見たのが、自分の青春の一枚の絵の様な気がした。激しいけれど、静かな時間が二十代に流れていくような気がして、この絵をいつも見ていた。

君こそ淋しがらんか ひまわりのすばぬ
けて明るいあのさびしさに

佐佐木幸綱 群黎

青春真っ只中の向日葵のうたである。君というのは友達とも取れるし、愛する人とも取れる。向日葵は咲いているというより人格を

持つて、そこに立っている感じの花。その明るさ、大らかさゆえに、限りなく人を寂しくさせる。

向日葵をきみは愛しめり向日葵の種子く
ろくろとしまりゆく頃ぞ

坪野哲久『桜』

坪野哲久はプロレタリア歌人で、激しい反戦のうたを詠んだ人だが、細やかな植物のうたや、子どもに対する優しい作品も多くある。毎年、向日葵を植えて、ぐるぐると渦を巻いて実った種子をとった後、そののちどうしていたのか思い出せない。母が鎌で刈ってあの大きな花を捨てていたのであるか。

向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高
し日のちひささよ

前田夕暮『生くる日に』

大正三年六月、前田夕暮はとりつかれたように、向日葵の連作を作った。そして代表作ともいえるこの作品ができた。ゴッホの絵の影響があるといわれている、情熱的な向日葵畑の作品である。

夏休み、田舎へ帰る電車から畑の端に咲く、大きな向日葵を探しては「おはけ向日葵」といって喜んだ記憶がある。



昼顔

「すべての女は昼顔だ」と書いたのは詩人の吉原幸子である。昼顔の花には女性の生理的なものが、感じられる。どんなにカンカン照りの真夏でも、昼顔は毎日、つぎつぎ花を咲かせる。蕾のついた蔓を摘んで持って帰り、

水にさすと、やがて開く。弱そうで案外強い花なのである。

暗い昼それより暗くひるがほの薄き花びら陽をつつみるき

河野裕子 　ひるがほ

河野裕子は女性歌人のなかでも、昼顔の花



ひるがお 昼顔

の歌を作りつづけている人である。真夏、貧血でふっと立ちくらみするような、明るすぎると暗さ。うすくれないの昼顔のはなびらは、そんな危うい世界を呼び寄せている。青草をさくさくと食める牛の口にひる顔の花もつきて入りたり

真鍋美恵子 　怪

夏草の匂いがむっつきそうなたである。昼顔の花はどんな味がするのだろう。かおばなといって、万葉の時代からある花なので、その頃から牛も食べていたのかもしれない。朝顔のように種は実らず、地下茎で増える花だという。畑に生えると除草が困難なほどらしい。

肺尖にひとつ昼顔の花燃ゆと告げんとし
つたわむ言葉は

岡井 隆 　朝狩

作者は内科医であった。見えているのは病巣の影であろう。患者に向かいながら、どのような言葉を次に言おうか、と考える。その間に、だんだんその影が昼顔の花の形のように見えてきた。



百日紅
さるすべり

百日紅

木槿むくげがあっけなく散ってしまい、やや寂しい気がしても、夾竹桃あざぢくとうと百日紅さるすべりは、夏が過ぎるころまでずっと咲き続けている。百日紅の木は花が終わり、葉が散ってもわかる木だ。その名の通りすべすべの木肌をしている。暑

い道を歩いてきて出会うと、ちりちりとした花が、少しは涼しさを感じさせてくれる。

そのかみの百日紅ひゃくじつこうは軍帽の赤き総なり忘れねば見る

森岡貞香もりおかさだか 百乳文ひゃくにゅうもん

百日咲くからひやくじつこう。こう読むと

まったく違う花のイメージになる。真夏の花は戦時中を生きた人にとっては特別な花である。仰ぎ見る百日紅の花の中、軍帽の下の意を決したような眼が、じつとこちらに注がれている。

長崎の昼しづかなる唐寺たうじやおもひいづれば白きさるすべりのはな

斎藤茂吉さいとうしげき つゆじも

病のときに見る花というのはいつもと違う印象がある。茂吉はこの頃、結核の療養中であつた。じりじりと暑く、けだるい身体に白い百日紅は軽々と咲き、散り、咲き継ぐ。

年老いしアナスタシアをおもふとき百日紅の花の下の永遠

小池 光こいけみつ 日々の思い出

(八月二十日へ木)「ロマノフ家の最後」再読」という詞書ことばがきがつけられたうた。ロシア革命時に虐殺されたはずの、皇帝一族のひとりアナスタシア主女。のちに生存説が出た有名なアナスタシア事件。謎に満ちたこの事件と、百日紅の花が出会うとき、ふっと白昼夢のような時間が訪れる。

まえだ・やすこ 「塔」会員